
【特集】労働者文化運動論——1950年代の日本

特集にあたって

篠田 徹

今回の特集は、「労働者文化運動論——1950年代の日本」である。まずここでは総論として、この特集に関する問題意識を述べてみたい。そこでまず問題を「1950年代の日本」とその時代の「労働者文化運動」という二つの面に分け、それがこれまでどのように論じられてきたかを考え、それを踏まえて今後の労働者文化運動の研究方向、とりわけ20世紀の日本のその比較研究について問題提起してみたい。

1950年代論

1940年代と1960年代という二つの「激動期」（前者は主に政治経済、後者は社会文化の）にはさまれて、1950年代は、歴史においてながらく地味な存在だった。しかも1950年代は政治経済や社会文化の両面で、その前後に負けじ劣らじの激動を経験したにもかかわらずである。

それは筆者を含めて1950年代とそれ以前に生まれ、いまでも生きている多くの人びとの記憶や、それらの人びとが人生を語るときにも、1950年代の部分は、何か控えめな感じ、あるいはせいぜいその後のハイライトの序章的な部分にとどめられることが多かった。それはこれらの物語の語り手や聞き手の中心が、世界にあふれるベビーブーマーたちで占められてきたせいかもしれない。彼ら彼女らにとって1950年代とは、まさに「未成年」の時代だったのだから。

この歴史や記憶の選択者の担い手に関する世代論は、一見トリビアルなものに見えるが、「1950年代論」を考える上で重要である。というのも1950年代が地味な時代に位置づけられてきたこの20世紀末以来、1950年代に関するそれまでの通説や既成のイメージを覆す作品は、ベビーブーマーの前と後の世代によって作りだされてきたからである。

例えばハルバースタム (David Halberstam) の『ザ・フィフティーズ』である (第一、二、三部、金子宣子訳、新潮社、2002年、原著 *The Fifties*, Villard Books は1993年)。1964年のピューリッツァー賞以来数々の賞を受賞したアメリカを代表するジャーナリストのハルバースタムは、1934年にニューヨークに生まれ、1950年代は彼がハーバードを卒業して駆け出しの記者として公民権運動の発祥の地南部で差別の現場を歩きそれを記事にしていた頃である。

この彼の作品は、1950年代が彼の生育と活躍の時期が1940年代と1960年代にはさまれているからか、1950年代を1960年代の発酵期ととらえ、1960年代に本格化あるいは開花する政治経済、社会文化のさまざまな事象を、これまでの「安定」や「沈黙」といった波風が立たない風のように見えた1950年代にすでにその萌芽があったことを丹念に描いている。したがってその後アカデミ

ズムの世界でもいわれるようになる「長い60年代」論のさきがけとしてこの作品を評価することもできよう。

このプレ・ベビーブーマーに対して、アメリカのポスト・ベビーブーマーの歴史家として、戦後政治やその延長上としての1950年代を見直す作品を世に送っている一人にデルトン（Jennifer Delton）がいる。*Rethinking the 1950s: How Anticommunism and the Cold War Made America Liberal*, Cambridge University Press, 2014という彼女の近著はその代表といえよう。ただ彼女の諸作品は戦後アメリカの主流となるリベラリズムを再評価するというモチーフから、その原点を第二次大戦中から戦後まもなくに置いている。それはまた従来アメリカの戦後レジームを1930年代のルーズベルト政権を原点にして考えてきたニューディーラーたちと異なる意味で、「長い40年代」論ともいえ、そこでの形成期、発展期としての1950年代という位置づけにも見える。

では日本はどうか。筆者の浅学のゆえだと思うが、プレ・ベビーブーマーの1950年代論は、自伝ないし私史、あるいは著作の復刻や著作集の形で著される場合が多いように思われるがどうだろう。それで真っ先に思い出すのが、高島喜久雄の三巻本『戦後労働運動私史』（第三書館、第一巻1991年、第二巻1993年、第三巻2008年）である。この本は確かに第一巻で、1945年から1949年を扱っているが、ハイライト部分は自身の労働運動への関与が本格化する1950年代を扱う第二巻（1950年から1954年）と第三巻（1955年から1960年）である。「私史」とはいいながら、この本は自他ともに認める高野（高野実第二代総評事務局長）派の著者が、深く関与した1950年代の総評労働運動を膨大な資料に基づきながら独自の視点から描いた一つの総評史である。

興味深いことに、このいわゆる1950年代前半の高野総評時代と、やはり当時高野派であった清水慎三氏が政治運動としては実質高野路線を引き継いだと考える1950年代後半の総評史とその外延部分の歴史（清水慎三「総評30年のバランスシート」清水慎三編著『戦後労働組合運動史論——企業社会超克の視座』日本評論社、1982年）は、ポスト・ベビーブーマー、特に1970年前後生まれの若手研究者の1950年代研究の主要な関心となる。

例えば、赤堀正成『戦後民主主義と労働運動』（御茶の水書房、2014年）、小熊英二『〈民主と愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、2002年）、宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』（影書房、2016年）は、労働史、思想史、文化史という領域と運動史を交錯させた諸作品である。

確かに『サークルの時代』のほかの二冊は、その記述が1950年代以前と以後にわたっているが、やはり思いが込められているのは、1950年代に総評労働運動がヘゲモニーを握ったいわゆる戦後民主主義運動の内包と外延の部分である。

ではなぜ1950年代論が、総評労働運動に直接間接に関わる領域に集中するのだろうか。その一つの理由は、この時代の労働運動のありようが、戦後労働運動のなかで特異なものであったことによるだろう。一応ポスト・ベビーブーマーの一人である筆者もこの狭義、広義の高野総評時代の戦後労働運動時代における「はみだしぶり」については、本誌で議論したが（篠田徹「企業別組合を中心とした民衆組合」とは（上）（下）」『大原社会問題研究所雑誌』564号、565号、2005年11月号、12月号）、それはまた労働運動が社会形成の上で重要な役割を果たした1950年代を、戦後史において特異なものにもしていたわけで、戦後史の見直しを考えるポスト・ベビーブーマーの研

究者が、この時代の労働運動とこの時代の運動特性であった裾野の広い外延部分に関心をもつことは、必ずしも不思議なことではない。

この戦後史における特異性から出発する日本の1950年代研究は、その当然の帰結としてその前後のつながりについては、アメリカのそれのように、明確な方向性をもっているわけではないように見える。確かに前述の作品では、その前後とのつながりや現代との比較の文脈で1950年代を論じている部分もあるが、それは例えば「長い60年代」や「長い40年代」、あるいは「長い50年代」のような一時代を画する時期区分のなかに位置づけられているとはいえない。

とはいえ、1950年代の労働者文化運動を論じることは、従来の議論の延長上で特定の時代の特定の運動分野を論じるとどまらない。それは、戦後史、労働史、社会運動史、民衆運動史をはじめさまざまな研究ジャンルのまなざしが、これまでそれぞれがもってきた論点や研究手法に新たな発展をもたらすと思われる芳醇な匂いを嗅ぎ取りながら、1950年代の社会労働運動とその接続領域のありように注がれていることからもうかがえる、それぞれの研究にとっての新領域を開拓する、あるいは忘れられた過去の領域を発掘するスリルと興奮を伴う作業でもある。

労働者文化運動論

では労働者文化運動論のほうはどうだろうか。本特集の所収論文が明らかにしているように、1950年代の労働者文化運動には、近年、労働者文化研究者以上に、音楽や文学、映画や演劇などそれぞれのジャンルの研究者がこの時代の特異なジャンル形成のありように関心を注いでいるようだ。

このことは労働者文化運動と他の文化運動あるいはマスメディアや文化産業を含めた文化活動全般におけるそれぞれのジャンルでのつながりや影響が意識されているのだと思う。これは興味深い。というのもこれまでの労働者文化運動論はどちらかというと、「労働者」の部分に力点が置かれ労働研究の分野に縛られている感がなくもない。これに対して近年は、文化のありようという観点から、さまざまな文化ジャンルの研究が労働者文化やその運動をも含めながら、それぞれのジャンルの歴史を紡いでいる。例えば音楽史研究家たちの十年に及ぶ共同研究の成果として出版された日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史（上）（下）』（平凡社、2007年）や日本映画史の決定版ともいえる佐藤忠男『日本映画史増補版（全四巻）』（岩波書店、2006年）では、1950年代の労働者文化運動の実態と成果がそれぞれのジャンルの歴史のなかにしっかりと位置づけられ、ジャンルの基準に基づいたそれらの作品評価がなされている。

このことは労働者文化運動を文化のありよう全体のなかで考える重要性を改めて感じさせる。もう少し踏み込んでいえば、労働者文化運動が文化全体のありように与えた影響やそれがどのような背景や環境によるものなのか、さらにいえば資本主義の発展とそこにおける労働や労働者のありようは、文化にいかなる形で反映されてきたのかという視点の重要性である。

こうした視点からアメリカの労働者文化運動を論じた秀逸の研究書にデニング（Michael Denning）の *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century*（London and New York: Verso, 1996）がある。デニングは、1930年代のアメリカのニューディール期のCIO（産別会議）を基盤とした左翼リベラルの運動を、当時共産党を含むその主導勢力が

唱えた呼称に基づき「人民戦線社会運動 (Popular Front Social Movement)」と命名し、それが当時のアメリカにおける大衆文化の発展を背景にして、アメリカ文化の「労働化 (Laboring)」をもたらしたと主張する。この本はその主張を証明するために、労働組合や共産党の周辺部や隣接ないし接続領域で、戦略的、戦術的、ならびに自然発生的に展開された文化芸術分野における運動を網羅的に分析した。

まずデニングは、この20世紀アメリカのカルチュラルスタディーズにおいて、この人民戦線社会運動をグラムシの理論を援用しながら歴史のプロックと考える。デニングの説明によれば、グラムシの歴史のプロックには社会勢力連合と特定の社会形成という二つの意味がある。そしてこの二つが結合したときにヘゲモニーが生まれる。すなわち社会勢力連合としての歴史のプロックが、ある代表形態を用いて合意を調達することで、社会形成という意味での歴史プロックを確立しながら、一定期間社会を主導するときヘゲモニーが生じる。そしてこの時代は、後にしばしばその社会勢力連合の名称で呼称される。

こうした理解に照らせば、CIOは形式的、組織的な実態である労働組合の連合体という意味を越えて、ニューディール連合という社会勢力連合の重要な一角を占め、1970年代まで続くアメリカのリベラルな社会形成のヘゲモニーの形成に寄与したといえる。CIOは確かに第二次大戦中を除けば政権参加をしたことはなく、支持政党の民主党を通じての部分的かつ間接的な形を除けば、直接国家権力の掌握やヘゲモニーを獲得したこともない。

他方で北米の都市部や工業地帯では、多人種、多民族が構成する労働者階級とそのコミュニティにおいては、CIOは絶大な政治的、社会的、文化的権威を有した。というのも当時の労働者が組合に加入するのは、経済的利益を期待する以上に、その構成員になることであたかも市民権が得られることを期待したからであった。それゆえ当時組合加入に殺到した労働者にとって、どの産業別組合に加入するかよりも、加入する産業別組合がCIOの加盟組織であるか、あるいはCIOに直接加入することが重要であったという。

このデニングがCIOならびにそれが一角を構成した民主党とそれが主導した政府を含む関連組織がヘゲモニーを握った20世紀半ばのアメリカのリベラル・ヘゲモニーの分析に適用した理論的枠組みは、このアメリカのリベラル・ヘゲモニーがその創出に深く関与し、そのグローバルなレジームの一角を構成した日本の戦後民主主義にも用いることができる。この場合、とりわけ総評・社会党プロックと呼ばれた社会勢力連合が、デニングの研究のCIOとそれが主導した人民戦線社会運動と同じ位置を占めよう。

特に1950年代、総評が当時CIOと同じように労働組合の連合体以上の存在であったことは、高野路線といわれた総評の平和運動や国民運動への深い関与と、それに対する国民各層のポジティブな応答からもうかがえる。

またまさに本特集がとりあげ、また前述した近年の1950年代研究が関心をもったように、総評は、CIO同様、都市部のみならず全国の労働者階級の間で、総評自身や加盟組織、さらにそこに連なる人びとの自主的なそれを含む旺盛な文化活動を通じて、政治的、社会的のみならず文化的影響力を有した。

このようにCIO同様、総評（あるいは総評・社会党プロック、さらに戦後民主主義）のカルチュ

ラルスタディーズが可能であるならば、デニングがこの本で提起したアメリカ文化の労働化という論点も同様に考慮に値する。デニングは前掲書で、CIO が中核的役割を担った人民戦線社会運動の文化政治がもたらした「文化戦線 (Cultural Front)」が、その後のアメリカ文化にもたらした「労働化」という変容を次のように説明している (16, 17 頁)。

第一にアメリカ文化の労働化とは、この時代のさまざまなレトリックや言説のなかに、「労働」やその類似、類義語が多用されている状況をさしている。このなかには「労働運動」「労働党」「プロレタリア」「仕事」「産業」といったものも入る。こうしてこの時代の文化戦線は当時の言語自体を「労働化」した。

第二にアメリカ文化の労働化とは、アメリカ文化のプロレタリア化というべき文化の産業的、技術的側面における変化の状況をさしている。それはまず文化や芸術の世界に労働者階級の参画とその影響力が増してくる状況をいう。それはこれまで大衆文化化と呼ばれる状況と重なっているが、他方でエンターテインメントやレジャー産業に、その多くは労働者階級の子弟である高卒や大卒の従事者が増大している状況もさしている。またこれらエンターテインメント産業やレジャー産業の商品やサービスを消費する労働者も増えていくことをもさしている。

第三に、第二の状況にも関係しているが、アメリカ文化の労働化においては、文化を構成する財やサービスとその提供を担う人びとのなかに労働の要素が可視化されるようになってくる。すなわち 20 世紀の初頭以降、文化が産業化されるにつれ、芸術家や演奏家、作家が次第に文化労働者になっていく。またその一つの結果として、文化戦線の中心的なエピソードの一つに、脚本家、漫画家、ジャーナリスト、教師などを含めたこれら文化労働者の組織化が登場してくる。

第四に人民戦線社会運動のめざしたものは、その後アメリカでヘゲモニーを握るニューディールのリベラリズムとも重なるが、まったく一致しているわけではない。というのもその文化戦線がめざしたのは社会民主主義的文化であったからだ。イギリスでは、社会民主主義の政治と文化や第二次大戦後ヘゲモニーを握った労働党は「レーバーイズム」と呼ばれたが、アメリカの人民戦線社会運動もアメリカ文化の労働化、すなわち社会民主主義化という意味でレーバリストであった。

第五に他の文化やそれまでのアメリカのそれと同様、アメリカ文化の労働化はそれ自体骨の折れるそれこそ労働過程であった。それは革命のように一夜にしてなるものではなく、苦闘や失敗をくりかえしながら、多くの人びとの手塩にかけた作業の結果として現実化するもので、その意味でアメリカ文化の労働化はそれ自体まさに労働であった。

このデニングのアメリカ文化の労働化仮説を、1950 年代の日本の労働者文化運動の分析にあてはめてみた場合、どうなるか。これは大いに検討に値するものと思われる。少なくとも 1950 年代を、第二次大戦以前や高度成長期へとつなげる上で、一つの重要な背景を提供するものとなろう。また日本の事例をアメリカや他の国々のそれと比較する上でも、有力な分析枠組みを与えてくれるものと考えられる。

もっとも日本とアメリカの労働者文化運動を考える場合、それは比較研究と同時に、トランスナショナルな運動史としてとらえる必要がある。例えばそれは、音楽、特に歌声運動においてもいえるかもしれない。通称ウォブリーズと呼ばれる世界産業労働者同盟 (IWW) では、組合員証とともに『Red Song Book (赤い歌集)』という歌集を渡したことで有名だが、このなかに英語圏の「イ

ンターナショナル」というべき歌で「Solidarity Forever」がある。この原曲は19世紀半ばの黒人霊歌であり、それは南北戦争時に「Battle Hymn of Republic（共和国讃歌）」としてその後合衆国の事実上の第二ないし第三国歌として特に軍人の間で歌われたものの歌詞を変えたものだ。実はこの賛歌は明治期に音楽教育の教材として日本に入り、その後の数奇な運命をたどったことが、音楽史の研究者によって明らかにされている。

また赤い歌集の歌は1930年代からアメリカのフォークソングとして広く歌われ、それはまたアメリカの「歌う労働運動」、さらに公民権運動やベトナム反戦運動とフォークソングの密接な運動結合において大きな役割を果たす。それはまた日本のフォークソングとべ平連をはじめとする70年安保前後の日本の学生運動、労働運動との密接な運動結合にも大きな影響を与えた（篠田徹「裏声で歌え“共和国讃歌”——トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜」梅森直之・平川幸子・三牧聖子編著『歴史の中のアジア地域統合』勁草書房、2012年）。

似たようなことは文学でもいえるかもしれない。労働者文学運動であれば、20世紀のプロレタリア文学運動として考えた場合、第一次大戦前後の日本での発展において、多くのアメリカの作家や前田河一郎などアメリカでの滞在経験をもつそのアメリカを舞台にした作品の存在は見逃せない。もちろんプロレタリア文学運動は世界的に展開されたものであり、日本に影響を与えた作品や作家はアメリカに限らないが、やはりこのジャンルでのアメリカの影響は特別である。

一方これまではプロレタリア文学運動の範疇に入れられてこなかった20世紀の記録文学やルタージュ、ノンフィクションといったジャンルも、この世紀の文学の書き手を拡大する運動、さきほどのデニングの言葉に倣って文学の「労働化」とみなせば、日本の戦前戦後の生活綴り方運動やその後の民俗学の興隆は、1930年代のアメリカのWPA（雇用促進局）のフォークロア・プロジェクトや、解放前後の中国の白話運動や革命文学との連関を見逃すことはできない（篠田徹「東方に相似あり——普遍としての日米中「三〇年代文学」」蘆田孝昭教授退休紀年論文集編集委員会編『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店、1998年）。

さらに1950年代の労働者文化運動を、社会主義の大衆的受容という観点から考えた場合、そこには中国革命の影響は大きなものがあったが、その実態の多くは、エドガー・スノーの『中国の赤い星』をはじめとするアメリカ人の戦前解放区の実態を報告した一連の作品がこの時期翻訳されたことによってもたらされた。また同じ頃、岩波新書をはじめ社会主義の入門書が、アメリカの左翼知識人による大衆的啓蒙書の翻訳でよく売れたことと合わせて、日本の労働者大衆はアメリカの左翼文化を通じて社会主義を学び、革命中国を理解していたということも覚えていていただろう。

ことほどさように1950年代の労働者文化運動の研究は、われわれに多くのことを学ぶ、あるいは学び直す機会を与えてくれる豊かな土壌である。

（しのだ・とおる 早稲田大学社会科学総合学術院教授）